



もど子と人婦

第五卷第一號

蛙と指環

(クリムのお伽話)

牧羊譯

むかしくある國の殿様に一人のお姫様がありました。ある暖い日お一人で、御庭の池の側に出で、ふだんから大切にしている金の指輪を、おもちゃにし



て遊んで居られたのですが、どうした具合でしたか、其指環を側の池の中へころがらせて仕舞ひました。

さあ、お姫様は吃驚して

「オヤ 仕舞った」

と仰って、いきなり、立って池の中をのぞいて見ましたが、指環は、深い池の底に落ち込んで仕舞ったものと見えて、影も形も見えませんが、お姫様は恨めし相に、しばらくじっと落ち込んだと思ふあたりの水の上を眺めて居らしたが、どうしたって、出てくる筈もありませんから、とうとう悲しくなってしまうって、聲を出して泣き出しました。

そうして居ると、どこからですか

「お姫様なぞ、そんなに、涙を流して泣いておいでですか」

といふ聲がしましたから、お姫様は、不思議に思つてひょいと、頭を舉げて聲のした方を見ると、一匹の蛙が、ひょこり、水の中から、頭を出して居ます。

姫「あら、いやな蛙だこと、お前かい、今物いったのは？ 私はね たつた今、大事のく指環をなくしちゃったから、もうどうしようと思つてかなしくつてく仕様がないの。

蛙「お姫様、そんな事なら、お泣きにならなくつても、私、今すぐ取つてきて上げましょう。

姫「まあ、お前、眞實にとつて來てくれるのかい、そんなら、私どんなに嬉しいか知れないわ。

蛙「けども、私「とって来ましたら、お姫様は、何を下さいますか」

姫「あれさへ取って来てくれることなら、何でも上げるわ、私の帽

子「でも、腕環でも、そうく此お正月におっ母さまから買って頂

いた大事の花籠でも、もう何んでも

蛙「あの、私「そんなものは頂いても仕様がありませんから、何も

欲しくはありませんが、どうかお姫様の友達にして下さる事は

出来ませんか、そうして、毎日、一所に遊んで頂いて、御飯も

一所に食べて、お寝みの時も一所に寝かして下さいましな、え、

ようございますか。

姫「それは、もう、あれさへ取って来てくれれば、何でも、お前の

思ふ通りにして上げるよ。

と仰おっしゃって見たが、心こころの中うちでは「なあに、これは蛙かえるじやないか、お池いけの中なかに居ゐるんだもの、御殿ごてんへ來きて、私わたしと一いっ所しょに御飯ごはんを食たべさせてくれなんて、可笑おかしい事ことをいふよ、蛙かえるなんかは、そんな事ことがどうしたって出で來きるものか」と思おもって居ゐらっしゃいます。

廻まけれど、お前まへ、眞實ほんとうに、指環ゆびわがとれるのかい、まあ、こんなに水みづが青あおくって、深ふかいのよ

といひますと、蛙かえるは

「なあに、深ふかいだったって、私わたしのお家うちなんですもの」

といふかと思おもふと、いきなり、頭あたまを水みづの中なかにつっこんで仕舞しまひました。お姫様ひめさまは、どうなる事ことかと思おもって、じっと見みて居ゐると、しばらくすると、指環ゆびわは口くちにくわへて、又またポカンと頭あたまを出だして來きて

「さあお姫様」といって岸の上へ其指環をほうり出しました。

「あら まあ」

といったきり、お姫様は、もう嬉しくってくいきなりとって左の中指にはめて、「蛙さんありがたうよー」といったきり、後をも見ないで 御殿の方へ走りかけました。すると、後の方から

「あ、もしく、前のお約束じゃありませんか、どうぞ、私も一所に連れて行って下さいまし、そんなに早くっては、私はとてもついて行けませんもの

といって、一生懸命に呼んで居ります。夫れでも、お姫様は聞こえない風して 可愛相に、其儘、すたくと かけて行って仕舞ひました。

夫おとこから、晩方ばんがたになつて、お姫様ひめさまは、お父様ちちさまやお母様かへさまと一所いっしょに御飯おんべんをめし上あがらうと思おもつて、お膳ぜんの前まへに并ならぶと、障子しやうじの外そとで、何なんだか、ピヨヨリピヨヨリといふ音ねがします。皆みな何なんの音ねだらうと聞きいて居ゐますと、小ちひさいく聲こゑで「お姫様ひめさま、どうか一寸ちよこゝを開あけて下くださいまし」

といひましたから、お姫様ひめさまは誰たれが來きたのだらうと思おもつて、何心なにざんなく立たつて行いつて障子しやうじを開あけてやりました所ところが、前まへつきの蛙かへるが、ちやんと行儀ぎよぎよく障子しやうじの外そとに兩手りやうてをついて居ゐましたから「ハッ」と思おもつていきなり、又またピシャリと障子しやうじを閉たて切きつて、御膳おんぜんの所ところへ戻もどつて來きましたが、お顔かほの色いろは眞青まうさばになつてぶるく慄ふるへてお出いででになる。お父様ちちさまは、其様子そのよすを見みて、

「父まあ、どうしたのだ、お化けでよもあったのか、そんなに慄へて居るのは」

「蛙いーは、お化じやないのだけれども、いやーな蛙が来て居るんですもの、眞實に私、蛙なんか大嫌！」

「といってまだぶるく、慄へて居ます、するとお母様は側から」

「夫で、其蛙が何かお前に用があるとしてもおいひなのかい」と尋ねましたので、お姫様は、今日晝あつた事をお咄しして、

「あんまりね、私のお友達になりたいくってせがむもんだから私も指環をとってくれさへすれば、してやるといって約束したの、けれども、蛙なんか、お池の中に居るんですもの、とても外に出てくる氣遣はありやしないと申つたのよ、そうすると、今

ちやんと、こゝに來て居るから、私、眞實にいやになつちまつ

たのよ

といてお話しして居ると、外では又、小さな聲で

おひめさま　おひめさま　さっきの約束

おわすれか　はやくこゝ　あけて頂戴

といて歌つて居ります。

すると、お父様は

「お前、約束した事なら、其通りしなけりゃいかんじやないか、

さあ、早く行つて開けておやり

と仰しゃるもんだから、お姫様も仕方なしに、立つて行つて障子

を明ておやりになると、蛙はすぐピヨコリとお座敷に這入つてき

て、ちゃんとお姫様の側に坐まつて居ゐましたが、さあ、御飯ごはんを召めし上あらうとすると

蛙かえるお姫様、どうぞ、お膳ぜんの上に私わたしを上げて下くださいまし、あんまりお膳ぜんが高たかすぎますから何も食たべられないんです

といひますから、又また仕方しかたなしにお膳ぜんの上うへに上あげてやると蛙かえるは、ピヨピヨ跳とび回まはっては、お姫様のお皿さしの中の御馳走ごちそうなど戴いたいて嬉うれしがって居ゐます。けども、お姫様を始め、他の人等ひとらは「なんだか、きたならしい」と思おもってしきりにいやがって居ゐります

暫しばらくくすると、今度こんどは

蛙かえるあのお姫様、私わたしもう眠ねくなつたから、どうかお二階にかいの、お姫様のお部屋へやへつれて下くださいませんか、そして、お姫様

のお寢床とこの中で寢やすませて下くださいましな

といひます。

お姫様ひめさまは、それを聞いて、もうつらくなつて仕舞しまつて、涙なみだをぼろく流ながして居ゐります。「なんだつてこんな、穢きたない蛙かえるを、私わたしの奇麗きれいな床とこの中なかへ入いれることが出来できやう、夫それに、こんなに冷つめたい身體からだなかかで觸さわられては」と思おもふもんですから、いやでく仕方かたがないのです。すると、お父様とうさまは又また

「お前まえ、自分じぶんのつらかつた時ときだけ助たすけてもらつて置いて、今いまになつてから、いやな風ふうなどしてはいけません

と仰おつしやるので、お姫様ひめさまも仕方かたなしに、二本ほんの指ゆびで蛙かえるをつまんで、お二階かいへ上あがつて行いつて、部屋へやの隅すみの方ほうへ、そーつと置まいてやつ

て、御自分ごじぶんは、すたくお布團ふたんの中なかへくるまッて仕舞しまひました、すると蛙かへるは

「お姫様ひめさま、私わたし、眠ねむくッて仕様しさまがなし、夫それに寒さむくッてく堪たりませんから、どうか、其中そのなかへ入いれて下くださいました。それでないと、私わたし下したへおりて行いッてお父様おとうさまに言いひつけますよ

と言いひましたから、今度こんどはもう、お姫様ひめさまも怒おどッて仕舞しまッていやだッたらいやだよ、眞實まことに、蛙かへるの様ような穢きたない、冷つめたいものなにか、誰たれが入いれてやるもんか、寒さむいッたッて、冬ふゆでも水みづの中なかに居ゐるじやないか、ほんとに生意氣なまこな蛙かへるだよ

といッていきなり起おきて來きて、蛙かへるをつまむが早はやいか、壁かべを目めがけて、力ちから一いつぱいになげつッけてやりました。しますと、蛙かへるはいきなり、



壺

ギヤツといって死んだと思ふと、忽ち、そこへ可愛いらしいいたら
ない位の、男のお子が出て来て、大へんお姫様に御禮をいって申
しますには

「もと、私は、此國のお隣りの殿さまの子どもでしたのですが、
ある時、少しの悪るい事をした故に悪魔の爲に、蛙にせられて
永い間、お庭の池ですむ様にせられました。夫で、もとの身體
になるにはどうしても、お姫様の力でなければならぬといふ
ことでしたが、不思議と、今日、指環のことから引き上げて頂
いて、とうくもとの身體になって、こんな嬉しい事はござい
ません」

といひましたので、お姫様も吃驚して、お父様に、その通り申し

上げるとお父様は、大層喜んで、幸ひ男の子がないから、お隣りの國へ、そういつてやつて、此お子を貰はうといふ事になつて、とうく此御子は、こゝに貰はれて、夫から、此お二人は、大層お仲よしのお友達になりましたとさ。

めでたしく

